作品を制作するにあたっての決め事
―高木厚人の場合―

高木厚人
TAKAGI Atsuhito

日展、朝日二十人展、読売展、書芸院展、日本の書展、臨池会書展、千葉県展、千葉県書道協会展、船橋市展、船橋市会員展、書教展、書統全国展等々、毎年一年間に出品する作品は大小あわせて三十作品にのぼる。今年は何を書こうか、どんな形式にしようかとその度ごとに考えるのは時間もかかり、エネルギーも消耗する。そこである時、一つずつの展覧会にテーマを決め、毎年シリーズで作品を書いていくことにした。その決め事を紹介させていただく。

1. どの展覧会にはどの形式で何を素材にするかをあらかじめ決めておく。

（例）日本書芸院展には6×6尺形式に全紙2枚を左右に貼り、和歌一首を散らす。

（例）読売書法展には2×8尺縦形式に和歌一首あるいは二首を書く。

（例）日展には3×8尺横形式に和歌三種、あるいは四首を散らす。等々。

2. 素材については現在は右の例については全て西行歌を書いている。

3. 作品構成を考える時には必ず、先達、先輩の作品（ときには作品の一部）を用意する。決して自分一人では考えない。優れた作品、感動した作品からイメージ、力を借りて作品構成を考える。

4. 自作の作品構成を考える時、無地の大学ノートを用意し、2B、3Bの鉛筆を用いてあれやこれやと考えてみる。

5. 一応の草稿ができたら筆を持って目標の大きさの紙に書いてみる。その後全体を見ながら修正を加える。

6. 今回掲載の作品は杉岡華邨先生の御作「述懐」をモデルとした作品である。放ち書きが主体であるのに流れがあり、明るくゆ

ったりとした作品である。

7. モデルとする作品に近い雰囲気になりそうな和歌を山家心中集の中から探す。一行目の感じ、二行目の感じ、そして右側に戻っての三、四行目の感じ、それらを見ながら和歌を探していく。

8. こういう手順を踏み書き上げた作品がここに掲載した作品である。以下、左の杉岡華邨先生の作品と右の高木の作品とを比べながら、どこからどういったイメージを受け取り、どう書いていったかを追いかけてみたいと思う。

Ⅰ. A「述懐」作品の逆形式の構成を真似することで書面の左側に豊かな文字集団が出来るように試みた。そしてその左で墨を入れ、右側の小さな集団に戻るように散らした。

Ⅱ. 左集団一行目、二行目共に、放ち書きを主とし、しかも縦線は左へ右へ、右へ左へ、と左右に重心を移動させながら全体として右下へと行が流れているとところを真似た。

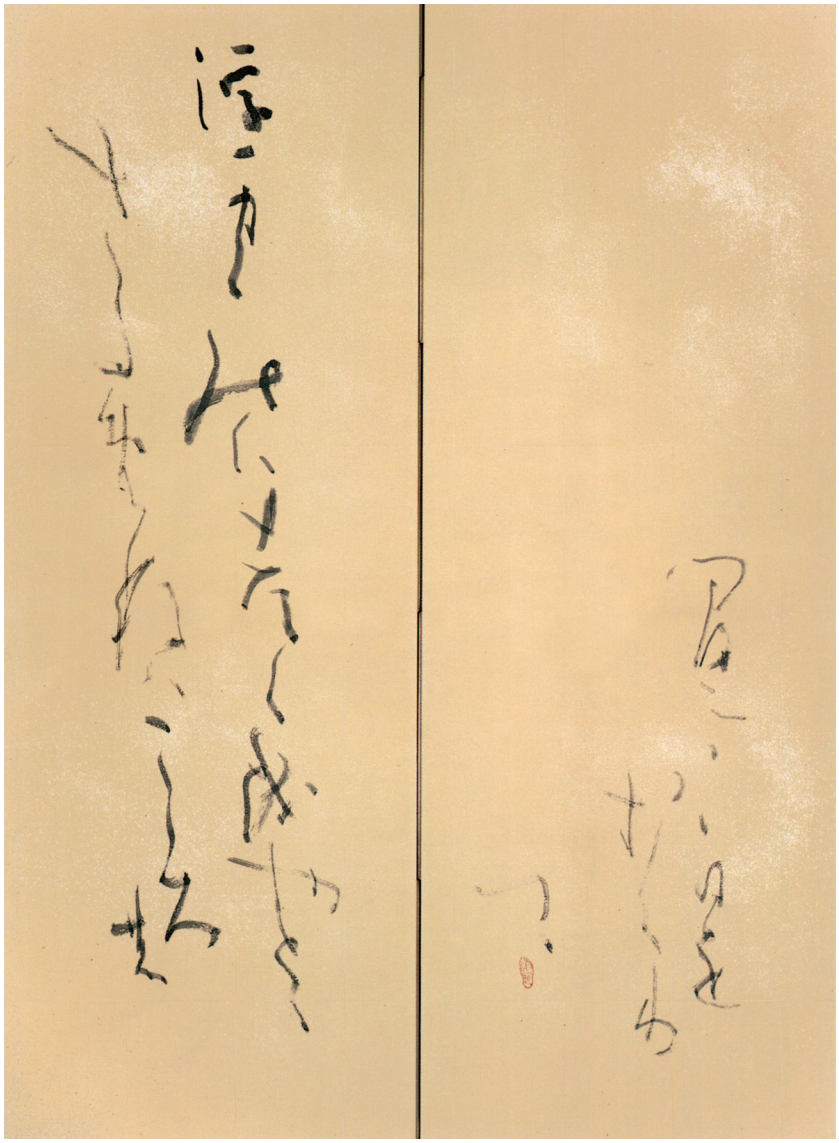
Ⅲ. A作品は（138×50×2）
B作品は（160×45×2）
と大きさが異なることと、Aは屏風、Bはパネルなので中央に縦線が入る、入らないの違いがあるため、B作品は全体に横幅をゆったり出すように心掛けた。

Ⅳ. Aでは30文字で書きあげているが、Bでは「春」「心」「山」と漢字を用い27文字で書いた。そのため、文字が大きく使えたと思う。

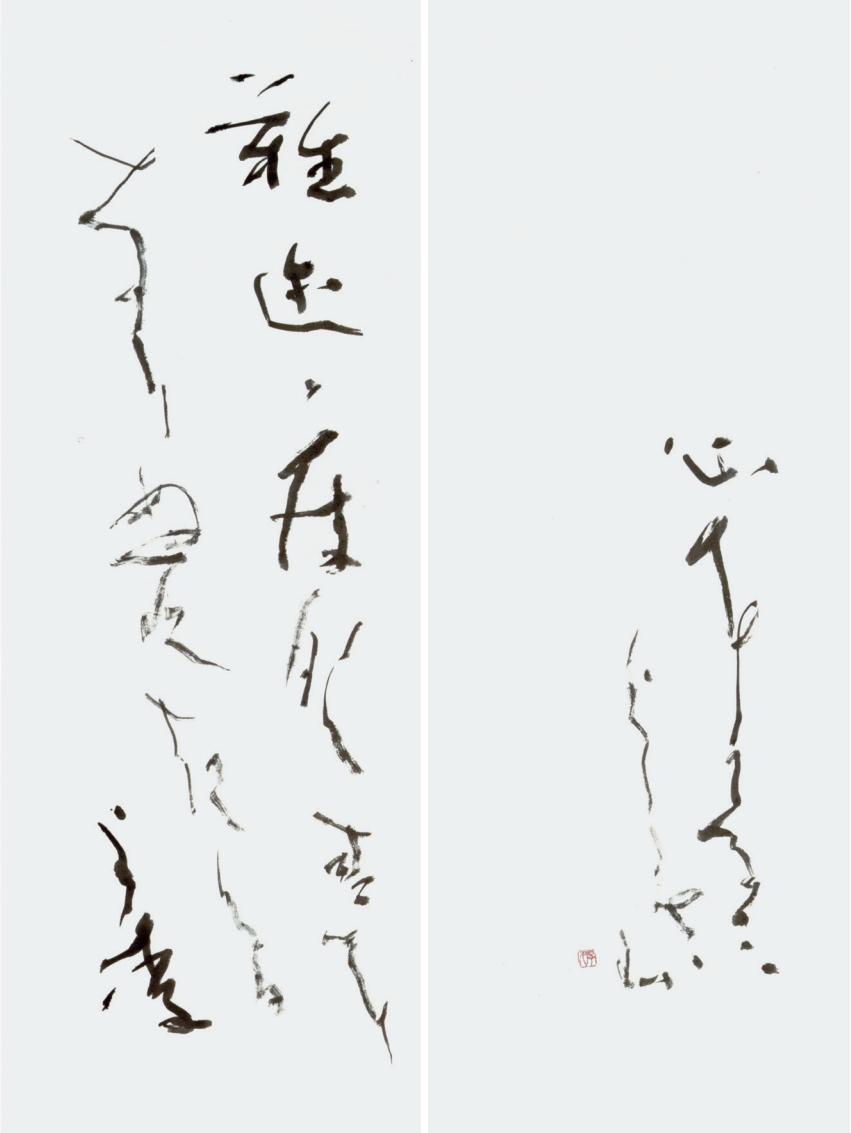
9. 以上のようにA作品をモデルとし、その作品の成り立ちを読み解きながら真似できるところは真似し、書き上げた作品がB作品ということになる。
このような手順でいつも、いいなあ、書きたいなあと思う作品を目標として作品制作を続けている。

A　春たつ日のうた
「述懐」

杉岡華邨先生



138×50㎝×２



B

「春たつ日のうた」

高木厚人

160×45㎝×２